週刊 日本医事新報
Japan Medical Journal
https://www.jmedj.co.jp
2022/10/29
No.5140
10月5週号 1921年（大正10年）2月5日 第三種郵便物認可（毎週土曜日発行）

18 特集
実践パーキンソン病治療薬
——最新のエビデンスをふまえて
前田哲也

01 画像診断道場〜実はこうだった
小腸の広範な壁肥厚……診断は？
土田優美 ほか

06 この人に聞きたい
マスク着用常態化による難聴者の困惑とその対策とは？
三好 彰

10 プライマリ・ケアの理論と実践
多次元的な貧困と健康支援
西岡大輔

14 Web医事新報チャンネル 質疑応答SPECIAL
ヒラハタ院長の法律相談——コロナ後遺症診療に法的リスクはあるか
平畑光一×川﨑 翔

33 消化管エコー動画読影トレーニング
心窩部痛を訴える71歳男性
——空腹時心窩部痛と食後の心窩部不快感
倉重佳子

50 たんぽぽ先生の 現場で役立つ在宅報酬の考え方
在宅療養支援診療所制度を巡る問題
永井康徳

03 プラタナス

08 難渋症例から学ぶ診療のエッセンス

16 感染症発生動向調査

17 感染症今昔物語

39 私の治療

64 J-CLEAR 通信

70 NEWS DIGEST

72 学会・研究会・セミナー情報

74 ドクター求 NAVI

77 ドクター掲示板

52 医療界を読み解く【識者の眼】
松村真司 国葬と ACP
西 智弘 患者の権利法
横山彰仁 肺機能検査はしんどい
西﨑祐史 GM-ITE 成績優秀者
神野正博 女王陛下のご尊顔
竹村洋典 総合診療医は問題を解決できるか
小倉和也 誰もが希望を持てる社会
徳田安春 収縮期雑音

マスク着用常態化による難聴者の困惑とその対策とは？

新型コロナ対策でマスク着用が常態化する中、仙台市の三好耳鼻咽喉科クリニック院長の三好彰氏らは、2020年12月に難聴児・者、今年2月には医療関係者を対象にした調査を実施した。マスク着用常態化によって難聴児・者はどのような困難に直面し、それをどう解消したらよいのか、三好氏に聞いた。

マスク着用で難聴者のハンディが増幅

―― 難聴児・者へのアンケートの結果を教えてください。

難聴児・者のほとんどは、聴覚だけではなく、相手の表情や口元の動きを見て情報を取得しています。コロナ対策でマスク着用が推奨される中、難聴児・者がいかに困惑しているか、その実態は知られていませんでした。そこで、当院では、2020年12月、全日本難聴者・中途失聴者団体連合会などの団体を通じ、「新型コロナウイルス感染症予防対策マスクと難聴者の会話に関するアンケート」を実施し、難聴児・者135人から回答を得ました。

マスク着用による困りごととして最も多かったのは、「相手の発音が不明瞭」「会話時に相手の口元が見えないために会話内容の把握が不十分になること」（複数回答で、それぞれ66.7%）でした。

また、補聴器や人工内耳を使っている約3割に、「後ろからの声かけに気付かず、振り向いたとしても誰に向けて反応すべきなのか判断し難い」との経験があることが分かりました。

そうした不自由に対する対策としては「筆談」（63.0%）が多く、「マスクをずらしてもらう」（26.7%）、「手話・指文字を併用」（25.2%）、「自らマスクを外す」（14.8%）といった対応をしている人もいました。自由回答には、「コロナ禍でマスクを取り外してとは言い難い、相手も不服そうで理解が得られない」「コロナ禍で入院した時、看護師がマスクを外してくれたが感染リスクを考えると申し訳ない」などといった声も寄せられました。

難聴児・者は普段から、耳が聞こえにくいことを外観からは分かってもらえない悩みを抱えています。そのため周囲の人に声をかけられても気付かず無視したと誤解されたり、知能に関わる勘違いをされたりして傷つくことが少なくありません。この調査結果から、コロナ対策によるマスク着用の常態化により、難聴児・者のコミュニケーションのハンディが増幅されていることがうかがえました。

難聴者の社会生活上の不利益への理解度は低い

―― 医療関係者に対する調査も実施したそうですね。

私たちの研究グループでは、今年2月、耳鼻咽喉科の医師、看護師、医療事務など96人に、難聴児・者に対する調査の結果と医療者向けのアンケートを送付し、「マスク着用難聴児・者の困難に対する医療関係者の理解度」を調べました。

その結果、「耳の障害は外観上判明しづらい」「難聴者は相手の表情・口元の動きから会話内容を把握している」といった点については、回答者の9割以上が認識していることが分かりました。しかし、難聴者のマスク着用の不利益として、「雑踏で、相手からの声かけに気付きにくい」ことを知ってい

コロナ対策によるマスク着用で

難聴児・者の7割がコミュニケーションの悪化を実感

健聴者は「耳マーク」について知り難聴者との会話に工夫を

図1
難聴者であることを知らせる耳マーク

図2
診察室などにあると便利な集音器の例

みよし　あきら：1977年岩手医科大学卒業。東北大学医学部耳鼻咽喉科勤務などを経て、92年開業。99年より南京医科大学国際アレルギーセンター主任教授兼任。著書に『花粉症を治す』（PHP新書）など。

た人は36.5%、「会話時、相手に口元を見てもらえない」点に気付いていた人は40.6%と少ない傾向がありました。難聴児・者と日常的に接している耳鼻咽喉科関係者でさえ、社会生活面での不利益についての理解は必ずしも十分でないと推察されましたので、難聴児・者のマスク着用の不利益について一般の人に対しても知らせる必要があると実感しました。

まずは耳マークの普及が重要

―― マスク着用による難聴児・者の困難を軽減するためにはどうしたらよいのでしょうか。

マスク着用による会話の不明瞭化などを改善する手段としては、磁気を使って補聴器や人工内耳の装用者の聞こえを支援する「ヒアリングループ」、デジタルワイヤレス補聴援助システム「ロジャー」、会話の音声をAIで文字化するポケトークなどの機器を用いる手があります。最近では、音声文字変換アプリも活用されています。

ただ、最大の問題は、聴力に異常のない健聴者には、難聴者が目に見えない障害を有している事実を外観からは認識できないことです。かつて箱型補聴器が主流だった頃には、それをまるで水戸黄門の印籠のようにかざすことで、難聴だと分かってもらえました。しかし、現在の補聴器や人工内耳は小型化しており、外見から難聴かどうかを判断するのは困難です。

難聴者であることを知らせる手段としては、「耳マーク」（**図1**）をマスクや衣服、カバン、診察券などに着ける方法があります。ただし、耳マークを知らない健聴者が多いので、まずはこのマークの意味を知ってもらうことが重要です。公共施設や医療機関などに耳マークを掲示して啓発する必要があるのではないでしょうか。

難聴の高齢者が“分かったふり”をしている可能性

―― プライマリケアの現場でできることは？

私自身は、難聴の患者さんを診療するときには、透明マスクをして口元が見えるようにしています。話した内容がタッチパネルに文字化される音声変換アプリの併用も有用です。

マスクを着用していると子音が不明瞭になりやすいので、ゆっくり、くっきり、はっきり話すことが大切です。その際、急に大きな声を出すと却って聞こえづらい聴覚補充現象が生じることには注意が必要です。耳が遠い患者さんには、**図2**のようなアナログの集音器を使うと会話がスムーズになることがあります。

高齢者が難聴を自覚するきっかけは、「さしすせそ」の子音が聞こえにくくなったということが多いです。子音が聞こえにくいために、会話の内容が全然分からなくなってしまう人もいます。診察室でうなずいて話を聞いているように見えても、分かったふりをしている可能性があることを認識すべきでしょう。

耳が不自由だと分かれば、対応の仕方はいろいろあります。耳が不自由であることを知られたくないと感じている難聴児・者もいますから、難聴というハンディが当たり前に受け入れられ、耳マークを着けることに抵抗感のない社会になって欲しいと思います。

（聞き手・福島安紀）